

資 料

10冊の絵本に描かれた対象喪失の様態について

高尾兼利

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成31年1月7日受理)

On the mode of object loss drawing in ten picture books

Kanetoshi TAKAO

(Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted January 7, 2019)

Key words : Object loss 対象喪失
Picture nooks 絵本
Psychokogical concept 心理学概念

1. 絵本に描かれた対象喪失の様態を取り上げる

筆者は『子ども学部紀要』の前号で「絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態を取り上げる」とついて記述した。ここではこの記述との重複をできるだけ避けて、肝要な部分のみを記述する。以下のとおりである。

筆者が授業で担当する心理学関係の科目に関する心理学の術語や概念を教える場合、抽象的に説明しただけでは、学生の理解は十分とはならない。概念に関連する具体的事象を適宜提示する必要がある。これにより、学生の理解は進む。心理学の各概念に関連する具体的事象をいかに豊かに提示できるか、しかもその事象を、物語性をもって提示できるか、これが教授者に求められると思われる。今回の論考はその時の一助になることが、主たる目的である。

さて、幼稚園教諭や小学校教諭は子どもの心の何を最も理解すべきか。多様に広範に理解すべき概念はあるが、今回は対象喪失に焦点を当てたい。子どもの日常は出会いと別れが避けがたい。入園は家族との一時的な別れである。卒園式、卒業式にはそれまで親しんだ友人や教師との別れがある。家族の引っ越しに伴う転校も時にありうる。こうした誰にでも起きうる対象喪失と、より深刻でまれに起こってしまう対象喪失がある。それは命あるものの死去である。飼っているペットの死、祖父母の死、父母や兄弟の死、友人の死などである。日常的な対象喪失や非日常的で深刻な対象喪失に、子どもたちはどのような心理的体験をするのか。この喪失に教師や保育士はどのように対応したらいいのか。具体性をもって、物語性を伴った理解が必要と思われる。

2. 対象喪失を描いた10冊の絵本のあらすじとその解釈

次に取り上げる絵本は、西九州大学佐賀キャンパス図書館に所蔵されている3001冊の絵本の中から、筆者が「対象喪失」を描いていて、豊かな物語り性を持つと考える10冊を選択し、解釈の対象としたものである。以下、10冊の絵本の物語のあらすじと心理学の概念を用いた解釈を記述していく。なお、カギ括弧内は絵本からの引用である。

1) 『なきすぎではいけない』

(内田麟太郎作、たかすかずみ絵、偕成社、1978年8月発刊)

現実とも想像ともつかぬ世界を感じさせるトーンで各シーンが描かれている。その絵のトーンは自らが亡くなった後のことについて、祖父が孫の男の子のことを想像して語っている絵本の展開とよく符合している。物語は祖父の死を知らずにバス停で待つ男の子のシーンで始まる。次の展開で祖父の死を知れば男の子は泣くだろうと予想されている。これに対して最初の祖父のメッセージが伝えられる。泣くことの肯定的側面すなわち、泣くのは弱虫かもしれないが「よわむしはひとのかなしみを おもいやれる」と、伝える。次は、祖父と男の子が一緒に過ごした「トンボとり」のシーンが語られる。私たちは、亡くなったばかりの人とこのことを思い出すと涙が出る、その自然な心の流れに沿って「ないてもいい さびしいのだもの」と語られる。この後に「でも なきすぎではいけない」と、この絵本の主題が告げられる。その理由として、祖父が好きな孫の姿は「わらっていた おまえ」「かけていた おまえ」と続く。次に、祖父すなわち一生涯を生きた者にこそ実感を持って意識されることが語られる。「ときは わすれさせてくれる」「ふとおもいだす」「おまえは おとなになっていく」「まごがうまれる」と、心の自然な動きと命の循環が教えられる。最後のメッセージとして「なくなったものは だれも いきているものの しあわせをいのっている」と語られる。結びは「なきすぎではいけない」で閉じられている。

死んでいく者自身のこと死んでいく者が執着する時、すなわち自己愛が過剰になる時、死はとてつもない苦難をもたらす。一方、残された者、特に家族（または愛する者）に思いを致した時、そこに自らの死の意味を見出した時、死は時に死にゆく当事者に豊かな何かをもたらす。そのもたらされる豊かなものをもたらすのは家族の存在である、死んでいく者の愛する対象である。豊かな死を遂げる者の家族は寂しさ、悲しさを生きて、その後より豊かな日常を生きることになる。しかしその悲しさはほどよいものでなければならない。「ないてもいいけど なきすぎではいけない」、これができるところに、ほどよい悲しみの体験があると思われる。この絵本はこのことを教えてくれる。

この絵本は大人のための絵本であろうか。筆者に

は近い将来死を迎える高齢者に贈る絵本のような気がする。この絵本を読んだ子どもたちは何を感じるであろうか。何を思うであろうか。悲しみを抱えながら「泣き過ぎないこと」の意義を感得するには、時間を要する。しかし、「泣き過ぎないこと」を意識することはできる。大切なものを失った時の、子ども時代の出発点として、泣き過ぎないことを考えさせる物語として、この絵本はあると思われる。

2) 『さよなら、おばあちゃん』

(西本鶏介作, 狩野富貴子絵, 校正出版社, 2010年6月発刊)

祖母の死に直面した小学校一年生まことの物語として描かれている。面会謝絶になっている祖母がいる病院の入口の付近で、病院に入るかどうか迷っているところに看護師が声をかけて、祖母の病室に連れていく。眠っている祖母を見て、まことは泣きそうになる。看護師に促されて祖母の手を握りしめながら、まことは内緒で持ち込んだ観音像を取り出し、祖母の寝台の棚に置いて、「おばあちゃん はやくげんきになって」と観音様に祈る。

自宅に戻ったまことは、祖母のことばかり思い浮かべる。特に野菜を作り、観音様にお供えした後、近所に分け与える祖母の姿が、喜んでいる近所の顔と共に思い出される。さらに、観音様について「こどものとき ひいおじいちゃんから いただいたもの」と祖母が伝えていたことを思い出す。絵本には、観音像と祖母の曾祖父と子どもの頃の祖母の姿が描かれている。この描写に、祖母の死を機会にした、4代にわたる世代の継承が暗示されている。まことはこうしたことを思い出しながら、毎日祖母が手を合わせ大切にしていた観音像を勝手に持ち出したことを意識する。「よくないと わかっています。」「でも、なんとしても おばあちゃんを たすけてあげたかったのです。」、とまことの祖母を思う気持ちが語られる。祖母への思いが一般的な善悪の境界を越える様子が描かれている。

自宅にいるまことに祖母の死が告げられる。まことは「かんのんさまは どうして おばあちゃんを たすけてくれなかったの」と無念の気持ちを観音様に投げる。これにまことの母が「かんのんさまがおばあちゃんを おじいちゃんの ところへ つれていってくれたんだよ。もうびょうきでくるしまなくても いいように」と教える。まこと自身の思いから祖母の側に立った理解への転換を母が見事に導

き出している。自己愛から対象愛へ、まことの意識の転換を導いている。これは別れの辛さを和らげるに足る方向性を親が子に与えていると考えられる。続いて絵本では祖母が祖父と花咲くあの世で出会っているシーンが描かれている。この絵本を読む子どもにいくらかのあの世についての現実感を与えるとされる。さらに、現実に戻り、母は「おばあちゃんに かんのんさまを もたせてあげたら うれしそうに わらったわ」と、まことの知らない、入院中の出来事を告げる。あたかも観音様が祖母と祖父との出会いをつくり、その結果祖母が微笑んでいるかのように感じさせる一コマである。

自宅に帰ったまことは祖母のいない寂しさに辛くなる。悲しむ。その時祖母が口癖のように言った「まことは おばあちゃんのたからもの」がまことに思い浮かぶ。自然と言葉が現れるのである。ここで言葉の力が発揮される。この言葉で、愛された自己がイメージされる。自らが誰かの宝である。しかも自らが大切に感じている対象の宝であると感じられる。この感覚が別れを可能にしていると、この絵本が暗示しているように思われる。「さよなら おばあちゃん」「まことくんは やっと おわかれの ことばが いえました」と書かれている。この後、母親が祖母の跡を継ぎ、畑で野菜を育てることが語られる。母親は「おばあちゃんに まけないように がんばらなくっちゃ」と母親がまことの肩をたたくところでこの物語は終わる。祖母から母への継承が暗示されている。

3) 『ママがおばけになっちゃった!』

(のぶみ作, 講談社, 2015年7月発刊)

子どもは幼児期に、母の不在を想像し、不安になることがあると思われる。交通事故で亡くなった母が気になっているのは、「4さいの かんたろうのことです。」とこの絵本にある。3歳前後で子どもは種々の能力が飛躍的に伸張し、主体的積極的になり、周囲の色々なことに首を突っ込むようになる。同年齢児に限らず母親とも衝突し、その衝突後に罪悪感が生まれやすい。この罪悪感が母の死を想起させるのかもしれない。悪いことをした罰として、大切な人や物が奪われる、その空想が幼児期の子どもに生まれる。このことは幼児の不安に伴うこととしてよく言われることである。

さて交通事故で亡くなった母は「おばけ」になって、子どもの近くを浮遊する。最初それに子どもは

気づかない。かんたろうは「ママに あいたい」と泣き始める。「てきとうな おりょうりが たべれなくなる」と惜しむ。次に「ウソ ついているのに、ごめんなさいしていない」と罪悪感が生まれ、その償いを願う。ただし、その中身は「はなくそを くちの なかに 入れたの」だったり、母親のことを「65さいって みんなに いったの。」と子どもらしい、他愛のないことである。これを読んだ者にユーモアを感じさせる。この絵本で取り上げられているテーマは母親の死であり、一般に重苦しいイメージが喚起されるが、絵本全体の雰囲気は、ほのほのと明るい。この色調で絵本の物語が展開されないと、この物語りが伝えたいことが重苦しさだけに彩られて、伝わりにくくなるからだと思われる。

ところで、この後夜中12時にいよいよ、母親が子どもの前に姿を現すことになる。透明で透けている母親がかんたろうには見える事態となる。ただし話の続きは、変わらず「はなくそを くちの なかに 入れて ごめんなさい。」であり、「ママの パンツ はいてて ごめんなさい。」となっている。

これを受けて、お化けの母はわが子が一人で入浴、排せつ、片づけができるか心配する。これを願う。しかし子どもは「ぜんぶ ひとりでなんて できないよ。(略)ママが いなく なるなんて いやだあ!」と泣き叫ぶ。母も、死んだばかりだからどうしていいかわからないと戸惑う。二人とも泣いてしまう。泣き声で子どもに付き添っている祖母が起きるといけなからと、二人は街に散歩に出る。

外はお化けでいっぱいである。「いきてる とき こう して おけば よかったのになって おもうひとが、おばけに なるのよ。」と母が子どもに説明する。これを機に母と子の話の展開の質が異なってくる。ただし、母には後悔がいっぱいあることが明かされた後、「いきてて よかったって こともたくさん あったわ。」と後悔とは反対のことが語られる。「あなたを うんだ こと。それだけは、ママ、だいせいこうだった。」と。さらにわが子が生まれて、母自身の命より大切だと思えることを発見したと語られる。かつ子どもが「かんたろう」だからよかったこと、しかもいいところばかりでなく、「ダメな ところが たまらなく すきだった。」と、わが子の全体を無条件に絶対的なものとして、愛していることが述べられる。母親のこの思いを子どもがしっかり自覚できたら、辛苦の中での母との別れが可能になるように筆者には思われた。最後に

「かんたろうの ママで、ママは しあわせでした。」で、母の言葉は終わる。この場面はページ一杯に涙に潤んだ、子どもを愛おしむ母のお化けとその母の手を握る子どもの後ろ姿が描かれている。それでもかんたろうは「ママ ……さよならしちゃ……ダメ……」と願う。朝起きると母親は不在である。しかし、これまでのかんたろうと違い、「ぼく、がんばって みる。ひとりで やれるよ。」と母親に届くように声に出して言う。子どもの自立の宣言である。その日の夜「ママの パンツを はきながら ねむると……。ママが ずっと そばに いるような きが しました。」とあり、母のパンツをはいたかんたろうの寝姿が微笑ましく描かれて、絵本は終わっている。言うまでもなく、母のパンツは、母の乳房と同じように、性的な色合いの薄い、愛着対象の代替として描かれている。

4) 『せいちゃん』

(松成真理子作絵、ひさかたチャイルド、2008年2月発刊)

幼児期後期の二人の男の子の出会いと別れの物語である。隣に住むいつも一緒にせいちゃんのことをもう一人の男の子の語りで絵本が構成されている。せいちゃんは補助車付き自転車でやってくる。その楽しそうな様子が絵本に描かれている。読んでいる読者にその楽しさが伝わってくる。せいちゃんは笑っているし、生き生きとしている。二人は毎日会っては別れ、別れては翌日に会う様子が想像できる。「きょうも せいちゃんが やってきた。」と書かれている。このような日々が続く中で、せいちゃんから、引越しの手紙が渡される。ただし引越しはしばらく先のことである。男の子に別れの予感はない。「ぼくは ひっこしの ことなんか わすれていたのに ひっこしの ひはほんとうにやってきました。」のである。それまでの間、二人は楽しい日々を過ごしていることが絵本の絵に描かれている。合羽を着て自転車に乗ってやってきたせいちゃんを傘をさして笑顔で迎える男の子、一緒にプールで遊んだり、花火を見上げたりする姿が描かれている。読んでいる読者にその楽しさが伝わってくる。別れの際にせいちゃんから男の子に自転車が贈られる。思い出の品である。せいちゃんを乗せたトラックをこの自転車で追いかける。絵本には追いかける時の男の子の形相が描かれている。怒っているようでも

あり、泣いてるようでもあり、我慢しているようでもある。いずれにしても必死の形相である。トラックが見えなくなったところで、自転車と共に転んでしまう。転んで見上げた空が青いことと転んで痛かったことで「ぼくと せいちゃんの さよならの なつ」と締めくくられる。

せいちゃんとの別れの後、自転車のお礼の手紙をせいちゃんに送る。せいちゃんからの返事に「はるになったら いきます。」と書かれている。再会が約束される。男の子は春を待ち焦がれる。せいちゃんにもらった自転車で遊びまわる。秋が来て冬になり春が訪れる頃には、男の子はせいちゃんとの約束を忘れてしまう。「ぼくは せいちゃんのこと だんだん わすれていた。」と書かれている。健康な子どもの自然な心の動きと思われる。忘れていたところに母親から「おにわの ところに はるがきてるわ。」と告げられる。せいちゃんの笑い顔が絵本の両開きに描かれている。この笑顔は男の子の喜びをそのまま表しているように感じられる。一時せいちゃんと遊んだ後、せいちゃんは帰って行く。その時は最初の別れでトラックを追いかけた形相は見られない。男の子の気持ちが絵本に述べられている。「さよならを しても また あう やくそくが ぼくを げんきに した。」と。ここに別れをめぐる子どもの心の成長が描かれている。さらに、せいちゃんが会いに来るのを男の子が待つのではなく、今度は男の子の方から会いに行くことが宣言されている。積極性の芽生えである。仲良くなった子どもの中で起きる別れを通して、子どもが成長していく様が、生き生きと描かれている絵本であると思われる。

5) 『ぼくとクッキー さよなら またね』

(かさいまり作・絵、ひさかたチャイルド、2000年1月発刊)

2匹の子熊、ぼくとクッキーの物語である。「ぼくと クッキーは とっても なかよし」で始まる。二人は水辺や、木の上などで遊んだ後「またね。」と言って別れ、次に会うことを繰り返している。ある時クッキーが「さよなら・・・」と言っただけで帰ってしまう。ぼくはその日のクッキーが「なんだか げんきが ないなあ」と気づいている。夕方母とクッキーがぼくの家を訪れて、翌日引っ越すことをクッキーの母が告げる。「なかなか いえなくてごめんね」と寂しそうにクッキーが詫げる。ぼくは

何も言えない。改めてぼくはクッキーが「またね」と言わなかったことに気づき、別れが現実のものと実感される。別れの実感は次第に切実になる。この時「ずうっと いっしょに あそぼうね。」と言っていたのに、去ってしまうクッキーに「クッキーなんかだいきらいだ。」とぼくは腹を立てる。別れの辛さに圧倒され、見捨てられ感と腹立ちに、ぼくは飲み込まれてしまう。クッキーもぼくと同じような別れの辛さに打ちひしがれているとの想像が、ぼくには生まれえない。別れの辛さを抱えながらも、思考がしっかりと働けば、自己と同種の相手の姿を想像できるが、ぼくはそこまでは成熟していないと理解できる。その後、ぼくはクッキーの家を訪れ、クッキーが泣いているのを見て、初めて「クッキーも さよならは いやなんだ」と想像できるようになる。去っていく相手が泣いているのを実際に見るまでは、この想像が生まれえないところが、子どもの心と言えるのかもしれない。

ぼくとクッキーは、お互いに別れたくないのに、別れなければならない。この葛藤に直面することになる。この葛藤場面を幾度となく繰り返して体験することで、子どもは別れの辛さを抱えながらも、見捨てられの不安に飲み込まれることなく、対象を信頼し、対象の辛さを想像できるようになっていくと思われる。

一方、個々の別れは永遠の別れを想像させる。ぼくも「いつも いつも、またあえた。でも、こんどの さよならは・・・。」と不安になる。この不安に苛まれて、毛布のような布切れと一緒に「どうしよう。」とくろげまわる。どうすればいいのか、答えが見つからないのである。この戸惑いと不安の中から、「そうだ、てがみを かこう!」と思いつく。こうした事態では周囲の誰かの助けは、有効となりにくい、と筆者は考える。カウンセリングの実践の中から生まれた考えである。そのことをこの絵本は教えている気がする。大げさではあるが、苦悩を凌ぐ解決法は苦しんでいる当事者の中から生まれたものでなければならない。周囲ができることは、苦悩する当事者を思いながら側にいることである。絵本では、書くのがおぼつかない中でぼくはクッキーとの過去の楽しかった思い出を書く。別れに際し過去がまず顧みられ、表現されることが必要であろうか。その後未来に心が向き変わる。未来への時間が子どもの中で誕生し、掌握される。その萌芽は、また会える状況での「またね」に求められるが、しばらく

くは会えない状況での長時間を見渡した時間の掌握がこうした事態で可能になる。ぼくの手紙には、ぼくとクッキーの顔の描写と「さよなら またね」が書かれている。以前の「またね」とは異なる、時間を掌握した上での「またね」であると筆者には思われた。

6) 『ずーっとずっとだいすきだよ』

(ハンス・ウェルヘルム作絵、久山太市訳、評論社、1988年11月発刊)

犬と「成熟した」子どもの物語である。「エルフィーは、せかいでいちばん、すばらしい犬です。」から始まる。ぼくより犬のエルフィーの成長が速いため、僕が幼少の頃は「エルフィーのあったかいおなかを、いつもまくらにするのが、すき」であった。この時期の子どもと犬の関係は子どもと母親の関係を想像させる。犬の成長は人間より速いため、犬はいずれ早く老年期を迎え死んでしまう。母であった犬が亡くなる。この体験は母との別れに通じるものがあるのかもしれない。さらに読み進めると、僕はエルフィーと一緒に遊ぶ。この時の犬と子どもの関係は、兄弟のようでもある。兄弟であった犬が亡くなる。これも母の時と同じことが言えるのかもしれない。すなわち子どもは動物との別れを通して、これから体験するであろう重要な他者との別れを前もって体験することになると思われる。この絵本はこのことに改めて気づかせてくれる。さて、僕がエルフィーを大好きで、「ぼくの犬」であることが語られ、その犬が悪さをして家族に叱られたことが描かれる。叱られる出来事に対して「しかっていながら みんなはエルフィーのこと だいすきだった」と僕の思いが語られる。叱るとなれば、嫌いとなるのが、認識と感情の直線的なつながりであるが、嫌いと反対の「すきだった」になっている。日頃の家族と犬とのかかわりを見て、僕が感じ、思ったことが述べられている。自分の大好きなペットを家族が叱ると、叱った家族に「そんなに叱らないで、かわいそうだよ」との気持ちになることが一般的である。しかし絵本の中の僕の場合は、家族はエルフィーを好きであるとの思いが生まれる。好きか嫌いか二者択一の情緒の様態すなわち分割機制につながるものではなく、正反対の情緒が同居し、統合される様態となっている。この子どもの心の成熟を思う。それともこれは成熟というより、この子どもと家族との人間関係の反映と捉えるべきであろうか。すなわち、ペッ

トを巡る、愛情深い家族の関わりが背景にあってこそ、「しかっていながら」「すきだった」との思いが生まれるものと思われる。家族での営みが子どもの心を成長させていくことを感得できる。

こうして、穏やかで、生き生きとした、ペットである犬と子どもの関わりが描かれた後、犬がしだいに老いてくる。「さんぽを いやがるようになった。ぼくは、ともしんばいした!」とあるように、子どもがどこかで犬との別れを予感していることがうかがえる。獣医に「エルフィーは、ととったんだよ」と宣告される。犬を乗せた車付きのバスケットを悲しそうに引く子どもの姿が描かれている。さらにエルフィーは老いていき、階段も登れなくなる。寝る時はエルフィーに柔らかい枕を用意する。僕の幼少期には犬のエルフィーの枕で僕が眠っていたのが、反対にエルフィーに僕が枕を用意するように逆転している。枕を用意しながら、「エルフィー、ずーっとだいすきだよ」と言ってやる。その時の子どもと犬が両者笑顔で向かい合っている姿が絵本には描かれている。慈しみ労わり合う笑顔である。さらに、眠りに着いた子どもの夢の映像として、野原を子どもと犬が飛び回っている姿が描かれている。

しかし、ついに犬は子どもが寝ている間に亡くなってしまう。死にゆく犬に立ち会うのではない。犬を埋葬し、家族みんなが悲しみを分かち合う。その後、子どもがエルフィーに「ずーっとだいすきだよ」と言ってやったこと、一方兄や妹は犬が好きであったがそう言ってやらなかったこと、そのことが明確に語られる。この違いを子どもが意識できたことが「ぼくだって、かなしくてたまらなかったけど、いくらか、きもちがらくだった」との思いにつながっていることが暗示されている。やはり、対象を愛したこと、その自覚が喪失対象との別れの辛さを和らげることを教えてくれる。僕のエルフィーへの愛情は、エルフィー以外の子犬をくれると言われた時、「いらない」と断ったことでも表されている。最後には「いつかぼくも、ほかの犬をかうだろう」、その時も「ずーっと、ずっと、だいすきだよ」と言ってやることが誓われている。大切な対象を、生死を越えて愛することの重要性を強調して物語は終わっている。

7) 『さよなら を いえるまで』

(マーガレット・ワイルド文、フレヤ・ブラックウッド絵、石崎洋司訳、岩崎書店、2010年6月発刊)

大切な犬を突然の事故死により失った少年が、その死を受け入れる心の過程を描いた絵本である。少年と亡くなった犬との関わりも印象的である。さらに少年の父親の思いやりにも注目したい。

「おとうさんと ハリーの ところへ、こいぬが、やってきました。」でこの絵本は始まる。すなわち母親は不在であり、父子のみの家庭に犬が加わる。子犬ジャンピーと少年ハリーの日中の相互交流が描かれた後、夜寝る時のハリーとジャンピーの関わりが描かれている。日中より寝る時の犬と少年の関わりが両者の親密さを表している。すなわち、ハリーのベッドにジャンピーがやってきて、「おやすみ、ジャンピー」と両者が見つめ合う。その時のジャンピーの目は「きらきらしています。」とあり、印象深い。筆者にはジャンピーが不在の母の代わりのように感じられた。この関わりは父の目を盗んでの関わりであり、父との間では満たしにくい親密な関わりが犬との間で体験されているように思われる。父親の側からすれば、この両者の関わりを侵害しない思慮深さ、すなわち父との間では満たしにくい、しかし母親不在の少年には必要な情動をこの犬との間で満たされることへの洞察、これがこの父親にあると考えるのはどうであろうか。

そうした関わりが続いたある日、ハリーが学校から我が家に帰ると、ジャンピーの出迎えがない事態になる。父親は玄関に腰かけて、涙を拭いながら、「いいかい、ハリー。じこが あった。ジャンピーは、しんじゃったんだよ」と告げる。ハリーは「うそだ！」と叫ぶ。その後鞆を放り出し、茫然自失のままテレビを見る。父親は「おはかに いれるよ。さよならを いわないのかい？」と尋ねる。ハリーは「いやだ！」とテレビの音を大きくする。ハリーの心はジャンピーの死を受け入れられない。ハリーはジャンピーの不在に直面させられるベッドで寝ることができない。その喪失感「足もとから、もぞもぞ、ずるずる、せりあがってくる……。そんなジャンピーは、もういないのです。」と語られている。父親はハリーのこの辛さを理解し、リビングのソファを設え、ベッドにし、「ちいさなあかりもひとつ」灯してやる。このソファでハリーはジャンピーへの恋しさを実感する。喪失感と恋しさの実感、この二つの間の違い。遺されたものは喪失感には対処のしようがない。受身の状態に置かれたままであるが、一方恋しさは遺されたものの中にあり、求めるものとしてある。実感が伴う。絵本ではハリー

が「ジャンピーのぬくもり、ジャンピーのにおい、ジャンピーの声……」を実感していることが表されている。

父親はハリーの辛さを理解し、「きょうは、がっこうを やすんでいいよ」と勧める。しかし、ハリーは学校に行く。学校ではこうした体験は「だれにもいいませんでした。——なかのいい ともだちにも」とある。対象へのこうした恋しさは、他者に告げにくいことが描かれている。日常の心情からはかけ離れているからであろうか。この時点ではハリーだけのこととして、内密なものとする。

学校から帰ってきた日の夜、ソファで寝たハリーに不思議なことが起きる。亡くなったはずのジャンピーがハリーの部屋に入り、「ぴよんぴよん とびはねて、ハリーの耳を ぺろぺろなめ」、ハリーはジャンピーをぎゅっと抱きしめることができた。その時のジャンピーの体が「しっかりと、あたたかでした。」と語られている。ハリーの心の中でジャンピーは蘇り、すなわち復活したのである。ハリーの恋しさがジャンピーを作り出したのであろうか。ジャンピーと月明かりの下で走ったり、引っぱりっこしたりしたのである。しかし、一方でハリーはジャンピーが亡くなっていることを知っている。どうなるか。このまま毎夜、ジャンピーの体を抱きしめると温かく、月夜の下で引っ張り合いができる、こうした事態が続くのであろうか。もしそうなるのであれば、ハリーは、ジャンピーとの心の中の世界を現実界に持ち出して生きることになり、客観的な現実界を否認して生きることになると思われる。すなわちジャンピーの死を永遠に受け入れない世界に生きることになる。さて、絵本ではどうなるか。次の夜もジャンピーは「ちゃんと やって来ました」と語られる。しかしその姿が「ぼんやり」していて、体も「あたたかくありません。」とある。次の朝この経験をハリーは父親に話す。父親は「ちょっと しんぱい」になるも「だまって うなずきました。」とある。この日の夜「おいで、ジャンピー」と呼ぶも、ジャンピーは現れない。真夜中をだいぶ過ぎたころ、うずくまったジャンピーに出会う。この時のジャンピーの姿は「冬のきりのように おぼろげ」で、体は「冬のよるのように つめたくて」と語られる。ハリーの心の中のジャンピーが死に近づいていることを感じさせる。死が間近にせまったことを感じさせるジャンピーをベッドに連れてきて「からだをよせあい」「おでことおでこをくっつけ」て、「さよ

なら、ジャンピー」とハリーが告げる。この一連の過程は、ハリーが亡くなったジャンピーを復活させ、交流し、別れを告げる過程が描かれている。私たちは突然の別れは受け入れ難い。別れを悲しむには、時間が必要である。時間をかけてこそ、悲しむことが可能になり、別れを告げられるようになる。そのことをこの物語は伝えているように思われる。だから、亡くなった対象が生きているように感じられるのは、至極当然のことであると。ところで、亡くなった愛の対象をかくも自然に復活できるのは、子どもの特権であろうか。そのためにはこれに寄り添う大人が欠かせない。ハリーの父親のような存在が重要である。

8) 『くまとやまねこ』

(湯本香樹実文, 酒井駒子絵, 河出書房新社, 2008年4月発刊)

絵本の色調が優しく、静かに、柔らかい。全体が鎮魂の雰囲気醸成している感じがしてくる。くまの仲良しのことりが死んでしまったことから、絵本が始まる。くまは木の実で染めた箱に花びらを敷き詰めて、亡くなったことりをそっと寝かせる。箱の中のことりはまだ生きている感じがしてくる描写である。「ちょっとひるねでもしてるみたいです」とある。くまはことりが亡くなる直前のことを思い出す。「きょうの朝」をくまとこつりの間で大切にしていたことが分かる。こつりの死がくまにとって予想もしなかったこと、大変悲しくて、辛いことが語られる。「きのうはきみがしんでしまうなんて、ぼくは知りもしなかった。」とくまは大粒の涙を流す。くまは死んでいるこつりの入った箱を持ち歩く。周囲の動物たちが中を見たがるので見せると、動物たちは、「つらいだろうけど、わすれなくちゃ」と諭す。このやり取り、すなわち大切な存在を失くした人に対して、辛いことを認めながらも忘れることを勧める。このように、周囲の人は大切な者を失くした人と辛さを共にしないことが少なくない。悪気があってのことではなく、辛さを共に抱えることは、容易なことではないからである。抱えた方も同じような辛さを体験せざるを得ないからである。「わすれなくちゃ」は、一緒に辛さを抱えることを回避することにつながる。回避された人は回避する人から遠ざかざるをえない。くまも動物たちを拒否し、閉じこもってしまう。しかし、そうしていると、「すっかり、つかれてしまい」、「うつらうつら」とくまは

眠くなってしまう。眠りは一つの救いとなる。現実感を鈍らせることにより、辛さを幾分でも和らげる。疲れても眠れない時には、別れの辛さは深刻になってしまう。

目覚めたくまは風や草の匂いに慰められ、外に出ることができるようになる。この時にタイトルになっている、やまねこに出会う。この絵本はくまとこつりの物語ではなく、くまとやまねこの出会いが主調である。くまもやまねこも、同じ別れの辛さを抱えている。やまねこはそのことを言葉によってくまに知らせることはしない。このことは隠したまま、別れの辛さを悲しんだ者に生まれる思いやりで、くまに出会うのである。やまねこは「なかがよかった」こつりと別れて、「さみしいおもい」をしていることに触れた後、慎ましく「いっかいえんそうさせてくれよ。きみとこつりのために」と願い出る。このやまねこの奏でる音楽は亡くなったこつりと生きているくまをつなげる音楽であり、やまねこにとっては過去に辛い別れをした誰かとのことを懐かしく思い出す音楽でもある。この演奏の後、くまはこつりとのことを思い出し始め、ついに「なにかもかぜんぶおもいだし」てしまう。やまねこの音楽の力で全部思い出せた感覚がくまに導かれた、と考えていいのかもしれない。事実として全部思い出したというよりも、主観的に全部思い出した感じがしたと考えられはしないか。思い出したらこつりとのことは過去になり、埋葬が可能なる。埋葬の時くまは「ずっとともだちなんだ」と、やまねこにつぶやく。やまねこにはこの意味が分かると思われる。心の中に別れた対象が造られていくことにより、永遠に友だちで居続けることが実感できる。この実感を経て、こつりの代替の石が生まれ、埋葬が完了する。埋葬した後、やまねことくまの新たな関係が造られていく。くまがやまねこを取り入れる。微妙な、しかし肝心の優しさをやまねこから取り入れる。すなわちタンバリンの使われた跡を見て、「むかしのともだちをきいてみたい」とくまは一旦思うものの、やまねこには訊かないで「ぼくれんしゅうするよ。タンバリンをたたけるようになりたいな」と宣言する。あたらしい、静かな思いやりにあふれたカップルが誕生する。「くまとやまねこ音楽団」の誕生である。この音楽団は別れの悲しみに直面した者たちを音楽で癒し、慰めていくことと思われる。

9) 『わすれられないおくりもの』

(スーザン・バーレイ作絵, 小川仁央訳, 評論社, 1986年10月発刊)

この絵本を紹介する「お母さま方へ」には「かけがえのない友を失ったみんなは、どう悲しみをのりこえていくのでしょうか」とある。まさに悲しみを乗り越えていく過程がこの絵本には描かれている。

死にゆく者はアナグマである。アナグマは「かしこく」「みんなにたよりにされて」「きっと助けてあげる」「もの知り」の存在として登場する。しかも「死ぬのがそう遅くないことも知って」いるのである。死にゆくアナグマは、やや特別な能力をもった愛情深い存在として描かれている。極論すれば、神仏のような存在と言っていいのかもしれない。特にアナグマが「からだはなくなっても心は残る」、このことを知っていたとあるのは、そのことを感じさせる。また「みんなが悲しまないように」との思いも自己に執着しない態度であり、やや超人的である。絵本では生と死の境界は「長いトンネル」で表してある。仲間であるモグラとカエルが草原を楽しそうに走るの見て、アナグマ自らも楽しい気持ちになることが描かれた後、アナグマは夢の中でトンネルを抜ける。アナグマは「長いトンネルのむこうに行くよ さようなら アナグマより」の便りを残して、死んでいく。残されたモグラ、カエル、キツネ、ウサギのおくさん等、アナグマの友人達は「愛していたから悲しむ」ことになる。

冬が過ぎ春が来て、残された友人たちは、アナグマとの思い出を語り合う。モグラは紙の切り抜きを教えてもらったこと、カエルはスケートを、キツネはネクタイの結び方を、ウサギのおくさんは料理をそれぞれに教えてもらったことを思い出し、語り合う。この教えられて、それぞれに身に付けたことが、生きる喜びにつながっていることがそれぞれの語りの中で暗示されている。「たからものとなるような、ちえやくふうを残してくれた」と語られている。このように自らがいかに深く愛されたかをその時の感慨と共に語り合い、自覚することが悲しみを乗り越えさせる。

アナグマとの思い出を語り合った後、残された動物たちは、今度は楽しい思い出を語るができるようになる。最後にモグラが代表して「アリガトウあなぐまさん」とお礼を声に出すと、「そばでアナグマが聞いていた」気持ちになったことが描かれている。まさに喪失した対象がころろの中に蘇ったこ

とが暗示されている。そうした対象に愛されたことを感慨を持って想起することが、喪失の苦悩を和らげ、乗り越えさせることをこの絵本は教えてくれている。

10) 『いのちの木』

(ブリッタ・テッケントラップ作絵, 森山京訳, ポプラ社, 2013年9月発刊)

キツネが一人、森のお気に入りの場所で大好きな森の景色を見ながら身を横たえて死んでいく。この絵本の始まりの情景である。この絵本を読むものに静かな、厳かな死が思い浮かぶ。最初に別れを予期していたフクロウが横たわるキツネに寄り添う。フクロウの後に、森の動物たち、すなわちリス、イタチ、クマ、シカ、トリたち、ウサギ、ネズミが次々と集まる。親切で思いやりのあったキツネを前に、何も言えないで座り込む。打ち沈んだ雰囲気の中で、フクロウが微笑みながらキツネの思い出を語る。これに続いてネズミ、クマ、ウサギ、リスとキツネの思い出を語りだす。次第に動物たちの塞いだ心がほぐれていく。語られる内容は、キツネと落ち葉拾いの競争をしたこと、一緒に夕焼けを見たこと、キツネが子どもの世話をしてくれたこと、鬼ごっこをしたことなど、特別なことではない。ただし、それは否定的感情をもたらす出来事ではない。絵本では「キツネは、みんなに いくつもの おもいでを のこしてくれました。」とあり、またこの思い返しは「ほほえみを うかべながら」であることが述べられている。

その後、キツネの思い出を語っている時に、キツネが横たわっていた雪の下から「オレンジのめ」が現れる。思い出が語られる度にその芽はふくらんでいく。夜通しキツネの思い出を語り合った後、芽はついに小さな木になる。森の動物たちは、亡くなったキツネについて語り合ううちに大きくなっていく木を前に、「みんなは、木をみつめ キツネは いまも じぶんたちと いっしょに いてくれるのだ」と強く思うようになっていく。次第にキツネとの思い出が蘇ってきて、思い出すたびに、重く沈んだ気持ちが軽く晴れやかになっていくのである。

大切な存在が亡くなった時、亡くなった存在について語り合うことが、どんなことをもたらすのかを、この絵本が教えている。語り合うことが亡くなったものを遺された者の心の中で蘇らせることをこの絵本は教えている。さらに、語り合うことが亡くなっ

た存在の象徴の発見につながることも示唆していると思われる。この絵本では木がその象徴となっている。やがてこの木は森一番の大きな木になり、ついに森の皆が住める木になる。「木は、キツネのともだちがいのちのちからいきるささえと なったのです。」と述べられている。最終ページで「キツネは、みんなの ころのなかに いまも いきつづけています。」と締めくくられている。

これを読んだ子どもは何を感じるだろうか。この絵本は子どもの中にどんなイメージを残すのであろうか。少なくとも視覚的に目に映るものだけが世界の全体ではないこと、心の中に何かがあること、それは情緒を含むこと、心の中の何かは、自分一人で生まれるのではなく、色々な語り合い、関わり合いの中から生まれることが、子どもの心の中に残っていくように筆者には思われる。特に大切な存在を失くしたときに、絵本がもたらしたイメージが復活して、一人一人の子どもの中で成熟していくことを期待したい。

3. 10冊の絵本に描かれた対象喪失の様態について

10冊の絵本に描かれた対象喪失は人が対象である場合と人以外が対象である場合に二分できる。人を対象とする絵本が4編、人以外が6編である。

人の場合についてまず論じる。各一編で、祖父、祖母、母親、友人が対象である。

祖父や祖母の死は子どもにとって、父母よりも身近であり、現実にかかる確率が高い。『なきすぎてはいけない』と『さよなら、おばあちゃん』に共通しているのは、対象喪失に伴い、世代継承性が扱われているところである。『なきすぎてはいけない』では「おまえは おとなになっていく」「まごがうまれる」と残された孫に語られている。『さよなら、おばあちゃん』では、祖母の曾祖父、すでに亡くなった祖父のことが語られ、残された孫の母が祖母の畑づくりを受け継ぐことになる。この世代継承性、命の循環を子どもが少しでも意識できた時、祖父母との別れが子どもに何かをもたらすと思われる。

母親の死を取り上げた『ママがおばけになっちゃった』は、前節の解釈で取り上げた通りである。子ども自身が自覚できる存在価値は、愛着対象である母親から、無条件に愛されている感覚が核となり、この感覚が母親との別離を可能にすることが、この

母親対象喪失物語で改めて確認された。

『せいちゃん』では、出会いと別れに伴う、子どもの自然な心の動きが描かれている。最初の別れでは目に一杯の涙をためて、必死の形相で引越していくせいちゃんを追った男の子が、2度目の別れでは「さよならを しても また あう やくそくが ぼくを げんきに した。」と成長を見せるところが最も印象に残る。別離に際し、約束が心理的に一定の力を持つには、思考力と情緒の統制力が求められる。それはこの絵本で描かれているとおり、周囲特に親の支持と友人との出会いと別れの素直な体験で主に育まれると思われる。

人以外が対象となった喪失を描いた絵本は6編である。その中で5編が死を伴う物語であり、死を伴わない別離の物語は1編のみである。

『さよなら またね』は子どもの熊の、死去を伴わない別離の物語である。互いに別れたくないのに別れなければならない事態に直面し、これにどう対応していくかを描いている。こうした事態に戸惑いや不安を抱えながら自力で解決法を見出していく子どもの姿が描かれている。「そうだ、てがみを かこう」と思い立つ。思い立つまでは毛布のような布切れを抱えながら転げまわる様子が描かれている。こうして子どもは対象喪失を通して主体性を育てていくと思われる。

死去を伴う喪失を扱う5編のうちの2編が、ペットの犬との別れである。『ずーっとずっとだいすきだよ』は、心豊かな子どもの対象喪失体験を描いていると感じられた。この子どものように犬と出会い、犬と関わり、犬と別れることができれば、豊かな時間を体験できると思われた。その中でもやはり対象、この場合は犬を愛することが鍵になっている。すなわち、対象を愛したこと、その自覚が喪失対象との別れを可能にするということである。『さよならを いえるまで』は、突然の別れがテーマとなっている。突然の永遠の別れに子どもの心はどう応じるのか、この動きに周囲の大人はどう対応すべきかが描かれている。現実界での突然の別れをそのまま受け入れることは難しい。一度遺された者の心の中で喪失対象を蘇らせないといけない。一旦蘇らせた対象が消えていく過程に自らが参与する体験が必要である。そうしてこそ別れが可能であることをこの絵本は教えてくれる。まさに、さよならを言えるまでには、この心理過程が必要なのである。周囲の大人は子どもの心の営みの必要に共感し寄り添うことが

求められる。

残り3編の中で、1編は個別の別れを描き、2編はひとりの死と遺された大勢のものの体験を描いている。『くまとやまねこ』では、他の対象喪失を扱った絵本にはない、「音楽」の果たす役割を考えさせる一編である。やまねこは「いっかいえんそうさせてくれよ。きみとことりのために」とくまに申し出る。この音楽を契機にくまは失くしたことりの全てを思い出すのである。さらに亡くなった者の全てを思い出すことが、別れを可能にしてくれることをこの物語は伝えている。最後の2編はひとり対多の関係で描かれる対象喪失である。『わすれられないおくりもの』では、別れを可能にする、遺された者の心の営みの典型を示してくれている。亡くなっていくアナグマは残された動物たちにとってかけがえのない重要な存在である。遺された動物たちはアナグマにいかにか大切にされて、愛されていたのかを感慨をもって想起する。そのことが喪失の苦悩をやわらげ、別れを可能にしていく物語である。『いのちのき』は遺された動物たちが、亡くなったキツネのことを語り合うことで、亡くなったキツネが心の中で蘇り、キツネの象徴が生まれ、キツネとの別れを受け入れていく物語である。さらにこの象徴の木は、残された動物たちを幸せにしていくことが描かれている。大切な存在のとの別れに際して「語り合うこと」がいかにか大切かを改めて感じさせる一編である。

参考文献

- 1) 高尾兼利 絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態について 西九州大学子ども学部紀要第9号 pp143-154